



message

家業は天職
丹治潔

共に育ち、共に育つ。
支える事、やりがい。丹治光代



家族みんなで順番に行う上蠟の作業。45～60分ほどかけて蠟を竹の棒で練っていく。女性の力が加わることでほど良い練り具合に



潔さんが素手で蠟を上掛けしていく。一度蠟に手を付けると身動きが取れないため、光代さんが串に生地を刺して次に蠟を掛けるものを用意する



家族がひとつになり 和ろうそくの伝統と 未来を支える

和ろうそく職人

丹治光代さん 丹治潔さん

伝統の和ろうそくを手作業で
家族だからこそ続けられる職業

和ろうそくは植物性の原料からなるろうそく。主にハゼの実を絞った木蠟きろうを使い、大きな炎で蠟が垂れないのが特徴です。製造方法には棒型の芯に蠟を一層ずつ重ねていく「生掛け」と、木型に蠟を流し込む「鑄込み」の二種類があります。

この和ろうそくを家族で作って続けていらつしやるのが、東本願寺の近くに店を構える丹治蓮生堂さん。和ろうそく作りは全てが手作業で、一日にできるのは全工程中のたった一工程。始めてから仕上がるまで約十日ほどかかります。芯巻きを行い、型で生地を作り、上蠟で仕上げます。作業は、二人一組となり店先のわずかな一畳ほどの仕事場で行われます。

ろうそく作りのきっかけとは
夫婦が歩んだ和ろうそく作り

祖父が亡くなったことをきっかけにろうそく作りを始めた光代さん。父の仕事を手伝いながら大学の夜間部へ進みましたが、中退して仕事に専念することに。

「職人の仕事は傍から見ると簡単にできそうやけど、やってみると難しい。技術だけは長く続けないとどうしようもない。いまだに父にはかなわんのです。」と光代さん。仕事を続けて三十年になられるそうですが、自分は「まだ若手」とおっしゃいます。

妻の光代さんは十九歳の時に結婚されて以来、光代さんの仕事をずっと近くで支えてきました。「結婚してすぐ長男が生まれたので、子育てに一生懸命でした。店でのろうそく販売はしていましたが、今ほどつきっきりで作業をすることはなかったですね。十年くらいしてから奥の深い仕事だとわかり始めました。」と当時を振り返ります。

丹治蓮生堂さんのこれまで

- 1937年ごろ
祖父が創業
- 1979年
祖父が亡くなり、光代さんがろうそく作りを手伝い始める
- 1995年ごろ
光代さんが作業を手伝い始める
- 2003年
父が亡くなり、長男が手伝い始める

光代さんは、「ろうそくは夫を中心に家族で作ります。私が携わっているのは全体のわずかな部分です。でも、一人では作業ができませんから、父が病気になって夫が作業場の中心に入るようになって、自然と私が手伝うようになりました。でも正直、まさかこんな重要な作業までやるなんて、と思いませんたけど。」と笑顔。

そして、父が亡くなる前の二年半は二人で必死になつてろうそくを作ったのだとか。朝から晩までつきっきりで作業して、晩ごはんの支度をして、目が回る忙しさだったそうです。一言で和ろうそく作りと言っても、蠟を扱う以外のこまごまとした作業も多く、今では芯まきやお寺への箱詰め、発送などの手配は光代さんの仕事となっています。

和ろうそくを使い続けてもらうために
守っていくべきことと変えるべきこと

光代さんは若いころ、和ろうそく自体のイメージを変えたいと思い新しいアイデアを出すなどした時期があったそうです。「店を大きくしたいと思う時期は必ずある。でもすぐ戻るよ。昔ながらの和ろうそくを求めてくれる人がいるんやから、それに応えていくべきなんやな。今は、僕らがやっているこの仕事を認知されるように続けていきたいと思っています。」いつのまにか、父と同じような考えを抱くようになっていたという光代さん。

黙々と作業をしていた父とは正反対で、光代さんと蠟の具合や温度などについて話しながら作業をされているのだそうです。

「手伝ってもらうなら妻ですよ。少なくとも仲良く見える（笑）。一日中顔つき合やすなんて、と言う人もいけど、仲が良ければ平気です。慣れたらこの方が楽ですよ。」とのこと。どうやら一緒に仕事をしていくことが夫婦の仲の良さを保つ秘訣のようです。「女の人の力が必要だし、欲しいと思ってます。助けじゃなくてね。」と光代さんの横で笑う姿に夫婦で作る和ろうそくへの確かな自信を感じました。

